

# 文献資料内漢語の階層化：『明六雑誌』の漢語をめぐって

著者	小野 正弘
雑誌名	近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書
ページ	169-180
発行年	2012-10-31
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告；12-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002771">http://doi.org/10.15084/00002771</a>

# 文献資料内漢語の階層化 『明六雑誌』の漢語をめぐって

小野 正弘（明治大学文学部）<sup>1</sup>

## 1. はじめに

本稿では、『明六雑誌コーパス』を活用していく際のケーススタディーとして、近現代雑誌コーパスにおける『明六雑誌』初出となる漢語語彙について、語史（語彙史）研究を行う際の、基本的な性格付けを行なう。

具体的には、上記漢語について、『日本国語大辞典』第二版（以下、「日国第二版」と表記）の情報（初出資料、年代、意味等）と引き当てることにより、それらが、いつから使用されているものなのであるのか、また、それらが当初の意味で使用されているのか、それとも、変容された意味で使用されているのか、ということについての、展望を得る。

さらに、その分析の途上でいかなる問題が生じ、それをどう解決すべきかについても考察する。

今回は、『明六雑誌』に出現する漢語語彙（以下、「明六雑誌漢語」と略称する）について、その性格付けを試みる。その性格が明らかになれば、『明六雑誌』の漢語の位置が明らかになり、近代における語史を編んでゆく際にも、さらには、その前代の語史と接続する際にも、大きな指針となることが期待される。

## 2. 具体的手順

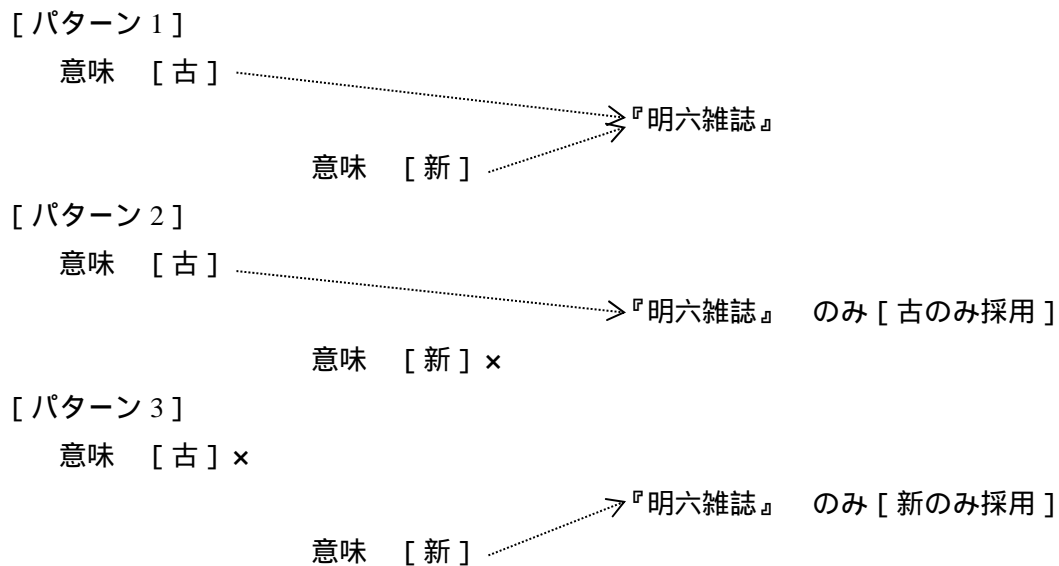
具体的な作業手順は、以下の通りである。

まず、(1)モデルコーパスとして作成中の『明六雑誌コーパス』から、漢語をすべて抽出したところ、7420語であった<sup>2</sup>。(2)今回は、分析方法そのものをテストしてみたいということもあって、一時に全体をあつかうことはせず、そのうち語頭が「ア行」の漢語のみを対象として、「日国第二版」との引き当てを行った。該当するものは、496語（全体の約6.7%）となる。(3)上記のリストに、「初出資料」「年代」を加え、その年代が、「明治」時代と、どれほどの隔たりがあるのかを計算するスペースを設けた。(4)ところが、「初出資料」「年代」のみだと、ある漢語が、あるときに意味変化（あるいは、新しい意味の獲得を）して、その変化した意味で用いられている場合に対応できないので、「修正資料」「修正（年代）」「明治（時代との隔たり）2」という項も設けた。(5)初出資料名は、「日国第二版」が用いているものをほぼ踏襲したが、

<sup>1</sup> wonomasa@kisc.meiji.ac.jp

<sup>2</sup> この抽出作業は、『明六雑誌コーパス』の作成途中に行ったので、公開版の『明六雑誌コーパス』とは、語数もその内訳も異なっている

「靈異記」「日本靈異記」、「平家」「平家物語」等のように、通行のものに改めたものもある。(6)年代については、「日国第二版」の西暦年数表記にしたがって記入した。『続日本紀』や古記録のような、記事日を年数とする表記法にも従った。ただし、「～頃」のような場合の「頃」は、計算の都合上、省いた。また、「1890-92」のように、複数年にわたるものは、最も新しい年数に統一した(上記の場合なら「1892」となる)。また、「12C初」「室町後期」などとされて、具体的な西暦年数になっていないものは、筆者が語史研究用に個人的に作成している成立年代表を用いて記入した(「平家物語」「太平記」など)。さらに、それに載っていないものは、『群書類従 正統分類総目録・文献年表』を用いて、年号付けを行なった。(7)「日国第二版」の見出しのもとに、複数の意味ブランチが分けてあるものについては、それらの中で、もっとも古い年代表示を持つものを、「初出」に記入し、「ひまわり」で当該の語を検索して、どの意味ブランチに該当するかを判断して、修正が必要な場合には、それを、「修正資料」に記入した。その場合、用例が複数あって、それらが複数の意味ブランチに該当し、なおかつ、もっとも古い年代表示を持つものにも該当する場合は、修正を加えていない<sup>3</sup>。



【図 1】 「明六雑誌漢語」における意味の新古

さて、「明六雑誌漢語」における意味の新古のイメージは、図 1 のようになる。パターン 1 は、ある漢語の意味が から に変わりつつ共存し(実際には、3 つ以上の場合もあるが、単純化するために、このかたちで考える)、そのどちらも『明六雑誌』で用いられている場合であり、パターン 2 は、意味が から に変化しているにも拘わらず、『明六雑誌』では の意味で用いられている場合、パターン 3 は、意味が から に変化して、『明六雑誌』では の新しい意味で用いられているというものである。<sup>4</sup>なお、(8)一字漢語で「日国

<sup>3</sup> 今回は、データを単純化するためにそうしたが、これをどう処理するかは、今後の課題となる

<sup>4</sup> このような判断を行って、修正資料の記入が必要となったものは、52 語あった。

第二版」には立項されていないものがあり、これは、全体の計数から省くことにした。また、「案」「安」などのように、「日国第二版」に立項され、一字漢語の例も示されているが、『明六雑誌』の用例が、はたして、一字漢語の用例としてよいかどうか疑わしいものがあり、そのようなものも、全体の計数から省くことにした。総じて、一字漢語の用法は、いろいろと問題がありそうであり、今後の詳細な分析が必要と考えられる。また、「以下(いか・いげ)」「王家(おうか・おうけ)」のような、読みをどう与えればよいかという問題の残るものも若干存在する(下線は、今回採用した読み)。このような観点から、全体の計数から除いたものは、49 語あり、したがって、今回の集計の際の母数は、447 語となる。<sup>5</sup>また、(9)「日国第二版」の掲げる初出資料よりも、『明六雑誌』の用例のほうが古そうな場合は、「ひまわり」で確認して、その旨を注記した。『明六雑誌』の用例のほうが、(たとえ 1 年でも)「日国第二版」よりも古いものは 45 語ある。<sup>6</sup>

### 3. 分析結果

今回分析対象とする集計する、「明六雑誌漢語」の母数は、前述のように、447 語である。

#### 3.1 年数の開きの分布

まず、「明六雑誌漢語」が、いつの時代から存在する漢語で構成されているのか、という問題を考える。

この際、従来のような、いわゆる上代・中古...からある、という考え方ではなく、明治から見て、何年前から使われている漢語を使用しているのか、という観点で考える。

まず、前記 2-(4)・(7)の修正以前の値で見てみると、次頁の【表 1】のようになる。<sup>7</sup>

これを見ると、明治との隔たりが 1000 年以上のものが 99 語あるが、最もその差が大きいものは「意」(勝曼經義疏、611 年)で、1257 年となる。また、500 年以上前から用いられている漢語が、全体の半数(51.5%)を占める。

明治時代以降、新たにつくった(導入した)漢語は、1 割を少し超えた程度である。

次に、前記 2-(4)・(7)の修正、すなわち、新しい用法で用いられている場合は、そちらの年代を採用するという操作を行なった数値で集計すると、次頁の【表 2】のようになる。

全体としてのおおまかな傾向は変わらないように見えるが、仔細に見ると、500 年以上前から用いられているものが減少し(18.1 + 27.4 = 45.5%、6 ポイント減)、明治以降のものが 3.6 ポイント増加している(16.8-13.2)ことが分かる。また、20 年前から用いられているものも微増している。すなわち、全体として、明治時代の方向へシフトしていることになる。<sup>8</sup>なお、修正前の【表 1】の数値は、『明六雑誌』のある漢語そのものが何年前から存在するかという数値であるのに対して、修正後の【表 2】数値は、『明六雑誌』のある漢

<sup>5</sup> 496 語 [(1)参照] - 49 語 = 447 語、である。

<sup>6</sup> 3-4 節参照。

<sup>7</sup> 年数の区切りかたは、便宜に従ったが、49 ~ 1 あたりが幕末、199 ~ 50 あたりが江戸、499 ~ 200 あたりが室町 ~ 江戸初、999 ~ 500 あたりが平安 ~ 室町、1000 年以上以前が平安以前に対応はする。

<sup>8</sup> このこと自体は、予測されたことである。

【表 1】「明六雑誌漢語」の時期構成(修正前)

1000 年以上前	99 語 ( 22.2% )	明治以降	59 語 ( 13.2 )
999 ~ 500 年	131 語 ( 29.3 )		
499 ~ 200 年	84 語 ( 18.9 )	見出し語にあるが用例のないもの	2 語 ( 0.4 )
199 ~ 100 年	26 語 ( 5.8 )	見出し語にないもの	3 語 ( 0.6 )
99 ~ 50 年	18 語 ( 4.0 )		
49 ~ 20 年	13 語 ( 2.9 )		
19 ~ 1 年	12 語 ( 2.7 )		

【表 2】「明六雑誌漢語」の時期構成(修正後)

1000 年以上前	81 語 ( 18.1% )	明治以降	75 語 ( 16.8 )
999 ~ 500 年	122 語 ( 27.4 )		
499 ~ 200 年	84 語 ( 18.8 )	見出し語にあるが用例のないもの	2 語 ( 0.4 )
199 ~ 100 年	30 語 ( 6.7 )	見出し語にないもの	3 語 ( 0.6 )
99 ~ 50 年	21 語 ( 4.7 )		
49 ~ 20 年	15 語 ( 3.4 )		
19 ~ 0 年	14 語 ( 3.1 )		

語の用法が、何年前から存在するかというものになっていることになる。

とはいえ、言うまでもないが、以上の結果は、あくまでも、ア行の漢語について明らかになったもので、これが力行以降にも同様にあてはまるものであるかは、いまのところ不明であると言えない。<sup>9</sup>

### 3.2 「新しい」漢語

ここでは、「新しい」漢語というものについて考察する。「新しい」漢語には、次の二つの概念が考えられる。すなわち、

明治時代（あるいは、その近く）になって、新たにつくられた（導入された）漢語  
語そのものは古くからあるが、明治時代（あるいは、その近く）になって、新しい  
用法を付与したもの

まず、のほうから見ていく。【表 1】のほうに拠って、49 ~ 20 年前から存在する 13 語を具体的に挙げると、

緯度,遠西觀象図説,1823,-45      委託,日本外史,1827,-41  
因習（襲）,日本外史,1827,-41      銳意,日本外史,1827,-41

<sup>9</sup> ただ、ア行だから特別な傾向にあるということも言えないだろうから、ある程度、他の行にも敷衍できるものであることは推測してよいだろう。今回は、このようなかたちの分析を全体に及ぼしてはどうかという提案の意味も兼ねている。

永安,報徳記,1830,-38	愛育,仮名文章娘節用,1834,-34
一環,江戸繁盛記,1836,-32	演技,江戸繁盛記,1836,-32
演劇,夜航余話,1836,-32	一世,椿山宛渡辺華山書簡,1839,-29
一隊,外国事情書,1839,-29	塩酸,舎密開宗,1847,-21
温度,舎密開宗,1847,-21	

となる<sup>10</sup>。次に、19～1年前からの12語を挙げると、

異性,異人恐怖伝,1850,-18	鬱然,漂荒紀事,1850,-18
英語,外国事件書類雑纂,1856,-12	英書,航米日録,1860,-8
英人,増訂華英通語,1860,-8	永統,春情花の朧夜,1860,-8
英米,航米日録,1860,-8	偉功,隣艸,1861,-7
往者,星巖先生遺稿,1865,-3	印刷,経済小学,1867,-1
英学,財政経済資料,1867,-1	冤罪,和英語林集成,1867,-1

となる。ここでは、「英～」という語構成を持つものが目につく。さらに、明治時代以降のものを挙げると、

暗殺,新令字解,1868,0	依拠,泰西国法論,1868,0
允可,明治月刊,1868,0	英仏,新令字解,1868,0
縁由,泰西国法論,1868,0	運輸,日誌字解,1869,1
鋭敏,漢語字類,1869,1	愛撫,神霊を鎮祭し給へる詔,1870,2
圧伏,西洋事情,1870,2	威力,西洋事情,1870,2
愛国,百学連環,1871,3	圧抑,西国立志編,1871,3
安息,西国立志編,1871,3	偉勲,西国立志編,1871,3
偉丈夫,西国立志編,1871,3	永遠,西国立志編,1871,3
英王,西国立志編,1871,3	英蘭,西洋聞見録,1871,3
閱歴,西国立志編,1871,3	演繹,百学連環,1871,3
音字,百学連環,1871,3	偉大,新撰字解,1872,4
一案,明六雑誌,1874,6	欧亜,明六雑誌,1874,6
王党,明六雑誌,1874,6	悪路,明六雑誌,1875,7
悪行,開花問答,1875,7	压制,文明論之概略,1875,7
遺利,明六雑誌,1875,7	殷鑑,文明論之概略,1875,7
旺盛,明六雑誌,1875,7	汚行,明六雑誌,1875,7
域内,東京新繁盛記,1876,8	以西,米欧回覧実記,1877,9

<sup>10</sup> 半角カンマで区切られた部分の構造は、「漢語語彙素，資料名，日国第二版による年代，明治時代との開き」の順。以下同じ。

以南,米欧回覧実記,1877,9	衣被,米欧回覧実記,1877,9
以北,米欧回覧実記,1877,9	移民,米欧回覧実記,1877,9
愛児,花柳春話,1879,11	院長,花柳春話,1879,11
淫蕩,花柳春話,1879,11	栄進,花柳春話,1879,11
黄色,造化妙々奇談,1880,12	亜,近世紀聞,1881,13
移動,哲学字彙,1881,13	印象,哲学字彙,1881,13
異常,日本開化小史,1882,14	栄誉,日本開化小史,1882,14
威令,経国美談,1883,15	畏敬,経国美談,1884,16
汚点,狐の裁判,1884,16	一読,小説神髓,1886,18
陰険,内地雜居未来之夢,1886,18	円,工学字彙,1886,18
欧土,小説神髓,1886,18	欧文,風俗画報,1898,30
一見,思出の記,1901,33	異質,ブラリひょうたん,1950,82
圧政,城,1965,97	

となる。これを見ると、『西国立志編』『百学連環』『米欧回覧実記』といった明六社関係者の資料がならぶ(『明六雑誌』は言うまでもなく)。なお、「日国第二版」の初出表示が、明らかに「明六初出」よりも後になるものがあるが、それについては後述する。

次に、すなわち、語そのものは古くからあるが、明治時代(あるいは、その近く)になって、新しい用法を付与したものを見る。これについては、2-(7)で述べたもののパターン3に当る52語のうちで、その修正した資料が、新しいものを見ればよい。修正の対象となった資料が、1800年以降のものを示すと、

一挙,延喜式,927,-941,椿説弓張月,1811,-57  
 唯々,太平記,1374,-494,椿説弓張月,1811,-57  
 悦,古事談,1215,-653,虫眼鏡,1812,-56  
 陰,十卷本和名抄,934,-934,都繁盛記,1837,-31  
 移住,紀伊続風土記付録,1194,-674,海外事情書,1839,-29  
 悪魔,宇津保物語,999,-869,鼠小紋東君新形,1857,-11  
 淫佚,令義解,718,-1150,西洋事情,1866,-2  
 一意,サントスの御作業,1591,-277,西国立志編,1871,3  
 隠匿,椿説弓張月,1811,-57,西国立志編,1871,3  
 悪法,日蓮遺文,1275,-593,文明論之概略,1875,7  
 運動,禅竹伝書,1456,-412,文明論之概略,1875,7  
 医学,文明本節用集,1474,-394,文明論之概略,1875,7  
 違式,三代格,802,-1066,音訓新聞字引,1876,8  
 印紙,清涼軒日録,1487,-381,西洋道中膝栗毛,1876,8  
 隠然,中華若木詩抄,1520,-348,音訓新聞字引,1876,8

異教,信長記,1622,-246,米欧回覧実記,1877,9  
一目,往生要集,985,-883,花柳春話,1879,11  
域,落葉集,1598,-270,花柳春話,1879,11  
位階,続日本紀,711,-1157,刑法,1880,12  
帷幕,本朝無題詩,1164,-704,五国対照兵語辞書,1881,13  
一部,延喜式,927,-941,郵便報知新聞,1892,24  
悪食,新吾左出放題盲牛,1781,-87,社会百面相,1902,34  
悪名,梅津政景日記,1612,-256,野分,1907,39

となる。<sup>11</sup>

最初の「一挙,延喜式,927,-941,椿説弓張月,1811,-57」というデータを例にして説明すると、「一挙」という語は、『延喜式』(927年)から見られる語であり、それに基づけば、『明六雑誌』との年の開きは941年ということになるが、『延喜式』における「一挙」の意味は《ひとたび行うこと》であり、『明六雑誌』で用いられている《ものごとが速やかにはかどること》<sup>12</sup>ではない。《ものごとが速やかにはかどること》の意味は、『椿説弓張月』(1811年)から見られ、その線で修正すれば、『明六雑誌』との年の開きは57年ということになる。以下も同様である。

これらを見ると、かなり古くからある漢語を、新しい用法で用いたものが多いさまが見て取れよう。なお、「違式」から下にある、明治8年以降(上記修正資料でいうと、データの最後の数値8以上のもの)の資料は、言うまでもなく、『明六雑誌』の例のほうが古い。

次に、初出資料と修正資料の年代の開きが大きいものを見る。500年以上の隔たりのあるものを示すと、以下の通りになる。

一揆,三代格,844,-1024,太平記,1374,-494,530  
一流,多度神宮寺伽藍縁起資財帳,801,-1067,太平記,1374,-494,573  
悦,古事談,1215,-653,虫眼鏡,1812,-56,597  
悪法,日蓮遺文,1275,-593,文明論之概略,1875,7,600  
悪風,今昔物語集,1120,-748,政談,1727,-141,607  
運上,書陵部所蔵壬生古文書,987,-881,室町殿日記,1602,-266,615  
悪道,観智院本三宝絵,984,-884,日葡辞書,1604,-264,620  
有無,法華義疏,615,-1253,平家物語,1250,-618,635  
一種,性靈集,835,-1033,史記抄,1477,-391,642  
移住,紀伊続風土記付録,1194,-674,海外事情書,1839,-29,645

<sup>11</sup> 半角カンマで区切られたデータの構造は「漢語語彙素, 初出資料, 年代, 明治時代との隔たり, 修正資料名, 日国第二版による年代, 明治時代との隔たり」である。

<sup>12</sup> これらの意味表示は、「日国第二版」のものを踏襲している。ただし、表記を若干変更したものがある。



帷幕,本朝無題詩,1164,-704,五国対照兵語辞書,1881,13,717  
 一理,法華義疏,615,-1253,東寺百合文書,1422,-446,807  
 一斑,令義解,718,-1150,四河入海,1534,-334,816  
 悪魔,宇津保物語,999,-869,鼠小紋東君新形,1857,-11,858  
 一番,延喜式,927,-941,無事志有意,1798,-70,871  
 安居,日本書紀,720,-1148,日葡辞書,1604,-264,884  
 一挙,延喜式,927,-941,椿説弓張月,1811,-57,884  
 一目,往生要集,985,-883,花柳春話,1879,11,894  
 陰,十卷本和名抄,934,-934,都繁盛記,1837,-31,903  
 案内,続日本紀,720,-1148,応仁略記,1670,-198,950  
 一部,延喜式,927,-941,郵便報知新聞,1892,24,965  
 違式,三代格,802,-1066,音訓新聞字引,1876,8,1074  
 淫佚,令義解,718,-1150,西洋事情,1866,-2,1148  
 位階,続日本紀,711,-1157,刑法,1880,12,1169

意外に、明治時代に入ってからのものはあまりなく、24 語中、6 語(修正資料名に下線を付したものを)を数えるのみである。逆に言えば、新しい意味が生みだされてのち、安定したものを用いていた、ということになるだろうか。年代の開きが大きいという意味で「新しい」意味を用いている漢語は、必ずしも、明治期における「新しい」漢語ではない、ということになる。

### 3.3 「明六雑誌漢語」と「日国第二版」

前述したように、「日国第二版」における初出例が、「明六雑誌漢語」よりも遅れるものが、45 語見つかっている。ア行に限定した 447 語のなかに 45 語も見出されるというのは、やはり多いと言って差し支えないのではないだろうか(10.1%にあたる)。『明六雑誌』は、「日国第二版」の用例採取資料ともなっているため、これは、資料全体をコーパスとしているか否かの違いによるものであろう。<sup>13</sup>

その具体例を挙げると、以下の通りである。

亜,近世紀聞,1881,13,,  
 愛児,花柳春話,1879,11,,  
 愛想,寛永刊本蒙求抄,1534,-334,,  
 悪食,新吾左出放題盲牛,1781,-87,社会百面相,1902,34  
 悪法,日蓮遺文,1275,-593,文明論之概略,1875,7  
 悪名,梅津政景日記,1612,-256,野分,1907,39  
 圧政,城,1965,97,,

<sup>13</sup> 逆に言えば、この『明六雑誌コーパス』の優秀さと、これを構築した意義もよく示すものと言える。

压制,文明論之概略,1875,7,,  
医学,文明本節用集,1474,-394,文明論之概略,1875,7  
域内,東京新繁盛記,1876,8,,  
異教,信長記,1622,-246,米欧回覽実記,1877,9  
畏敬,経国美談,1884,16,,  
違式,三代格,802,-1066,音訓新聞字引,1876,8  
異質,ブラリひょうたん,1950,82,,  
異常,日本開化小史,1882,14,,  
以西,米欧回覽実記,1877,9,,  
一読,小説神髓,1886,18,,  
一部,延喜式,927,-941,郵便報知新聞,1892,24  
一目,往生要集,985,-883,花柳春話,1879,11  
一見,思出の記,1901,33,,  
一夫,漢書列伝竺桃抄,1460,-408,,  
移動,哲学字彙,1881,13,,  
以南,米欧回覽実記,1877,9,,  
帷幕,本朝無題詩,1164,-704,五国対照兵語辞書,1881,13  
衣被,米欧回覽実記,1877,9,,  
以北,米欧回覽実記,1877,9,,  
移民,米欧回覽実記,1877,9,,  
威令,経国美談,1883,15,,  
殷鑑,文明論之概略,1875,7,,  
陰險,内地雜居未来之夢,1886,18,,  
印紙,清涼軒日録,1487,-381,西洋道中膝栗毛,1876,8  
印象,哲学字彙,1881,13,,  
隱然,中華若木詩抄,1520,-348,音訓新聞字引,1876,8  
院長,花柳春話,1879,11,,  
淫蕩,花柳春話,1879,11,,  
運動,禅竹伝書,1456,-412,文明論之概略,1875,7  
栄進,花柳春話,1879,11,,  
榮譽,日本開化小史,1882,14,,  
冤,春雨物語,1808,-60,近世紀聞,1878,10  
円,工学字彙,1886,18,,  
黄色,造化妙々奇談,1880,12,,  
欧土,小説神髓,1886,18,,  
欧文,風俗画報,1898,30,,  
憶測,音訓新聞字引,1786,-82,,

以上でもっとも隔たりの大きいものは、「圧政」の97年で突出して大きく、つぎは「異質」の82年、「悪名」の39年（修正資料による）「悪食」の34年（同）、と続く。<sup>14</sup>

なお、「一品」、「一婦」、「姻縁」、「右顧」、「易姓」の5語は、「日国第二版」において、見出し語として立項されていないが、『明六雑誌』における用例のあるものである<sup>15</sup>。

### 3.4 「明六雑誌漢語」と初出資料

「明六雑誌漢語」が、どのような資料で初出となっているかを見てみると、以下のようになる。

『続日本紀』32      『文明本節用集』15      『令義解』9      『万葉集』9  
『太平記』9      『史記抄』9      『菅家文草』8      『延喜式』7  
『今昔物語集』7      『西国立志編』7      『明六雑誌』7      『性霊集』6  
『法華義疏』5      『懷風藻』5      『日本霊異記』5      『本朝文粹』5  
『正法眼蔵』5      『童子問』5      『米欧回覧実記』5      『文華秀麗集』4  
『政談』4      『花柳春話』4

ここでは、頻度4以上のものを挙げたが、古い資料に例のあるものが多いことが目を引く。このことは、すなわち、「明六雑誌漢語」が、古い文献に典拠を持つもので占められていることを証し、それは、とりもなおさず、「明六雑誌漢語」を生みだした人々の、漢語についての知識のたしかさ、造詣の深さを証すものであろう。古い資料に典拠があるということは、すなわち、中国古典（あるいは、下っても、隋唐の資料）に典拠があるということだからである。

### 4. おわりに

以上、「明六雑誌漢語」を材料に、それがどのような性格を有しているのかについて、瞥見し、その階層化を試みた。今後は、この調査をすべての漢語に及ぼして、総合的にみるとどのような様相を示すのかを、さらに確認する必要がある。

また、新しい意味で用いられた漢語（修正資料を持つ漢語）については、古い用法も共存しているのかどうかを再確認する必要がある。そのこと自体は、修正資料を持つ漢語語彙を、「ひまわり」で検索して、実際の用例を確認することで果たせる（ただし、実際は、そこまで単純でなく、用例としてかなり微妙なものも目に付く）。

「新しい」漢語の用法についても、さらなる分析が必要である。特に、新しくつくられた（導入された）漢語については、その出所を考究する必要があるし、新しい意味で用いられるようになったものについても、その経緯を明らかにする必要がある。

<sup>14</sup> 本稿末の〔補足〕参照。

<sup>15</sup> これらが、『明六雑誌』以前に用例があるものなのかどうかは、さらなる調査を要する。

また、根本的な問題であるが、漢語の語彙素にどのような読みを与えるかも、今後の問題となろう。

さらに、同様の調査を、近現代における、他の主要な雑誌における漢語へと進めて行く必要がある。それらが完成すれば、近現代における雑誌のコーパスの漢語語彙は、この時期の漢語の語史(語彙史)をたどるための根幹として、重要な位置を占めることになる。また、今回は、「日国第二版」を一つの巨大なデータベースと見て、そのデータとの引き当てを試みたわけであるが、そのことによって、近現代における雑誌によるコーパスの側から、「日国第二版」の側へ引き渡すべき情報が生まれた。そのことによって、「日国第二版」というデータベースを補完するという、データのキャッチボールもできよう。

[ 補足 ]

壓政 ヤ且ヤ我國人民永ク壓政ノ下ニ屈シテ人性自由：明六雑誌：1874：12：政論ノ三：津田眞道：文語：P012A001(「ひまわり」検索)

権力や暴力などを用いて、国民の自由を奪う政治。圧制政治。

\* 城〔1965〕 水上勉 九「若狭三十二谷に、酒井圧政怨詛の聲が充満したとしても不思議でなかった」(日国第二版)

異質 テ之ヲ性質ニテ言ハ、異質ヲ變シ同質トナシ 之：明六雑誌：1875：42：人世三寶説四：西周：文語：P009A002

ルカ如シ 然ルニ今此異質ヲ變シテ同質トナシ抗：明六雑誌：1875：42：人世三寶説四：西周：文語：P012A003(「ひまわり」検索)

物事や人などの性質が他とちがっていること。また、そのさま。同質。

\* ブラリひょうたん〔1950〕 高田保 対面「同気同質の二人なら、対面して話の末に何か生れることもあるだろうが、異気異質の二人ではどうにもなるはずがない」(日国第二版)

悪名 ザルノミナラズ 往々悪名ヲ負ヒ罪人トナリ囚獄：明六雑誌：1875：37：賞罰毀譽論：中村正直：文語：P008A002(「ひまわり」検索)

「あくみょう(悪名)」に同じ。

\* 野分〔1907〕 夏目漱石 八「結果は悪名(アクメイ)にならうと、臭名にならうと氣狂にならうと仕方がない」(日国第二版)

悪いうわさ・評判。悪評。あくめい。

\* 将門記〔940頃か〕「前生の貧しき報いを憂へず。但し悪名の後に流(つたは)

るを吟（によ）ぶ」（日国第二版）

悪食 跣ニテ歩行シ常ニ惡衣惡食ニ安シ開化文明ノ風地：明六雜誌：1875：34：想像鎖  
國説（明治八年三月十六日演説）：杉亨二：文語：P002A013（「ひまわり」検索）

粗末な食物。粗食。あくしょく。

\* 社会百面相〔1902〕 内田魯庵 代議士・下「斯ういふ悪食（アクジキ）を  
貪って臭きを知らざる豚の寄合ぢゃから」〔中略〕

普通の人がいやがって食用としない物を食べる。いかもの食い。転じて、普通  
の人がいやがってしないようなことをしたり、趣味とすること。

\* 洒落本・新吾左出放題盲牛〔1781〕折助冷飯「契りみじかき一寸の間に、か  
たみの瘡（かさ）の身にしみじみと、命しらずの悪食（あくシキ）者と」（日国  
第二版）